特42
917

思
業橋
なつの歩
歳
芳川春濤閣
岡安起泉著
奇川國松画
辻文
梓

永閑
下の巻

つゞき 随分あつしと志 ぐさし既に今度の 九州まで付て来りし 程なるが其を浮絶 まで寡婦より生根に 悩く哉ぞ没 のよともに親 せよと云まして 有様に果し しが彼兄弟 志かならそで何より まんと義兵に 出きぬど丈夫く

△あたより、お仙も余義なく 帰らめなく、是まで今度の跡へく の法にも附けて縫ふきう 何か母姫ぞの先との別深が 多くて備事に付け結る仕 将いとの是が何を知らず 御地へと様りきよ出立しまく 十さんと隠く 自らが思ふ 陥を刻に浮 さので永岡 も漸く安 入し備何処

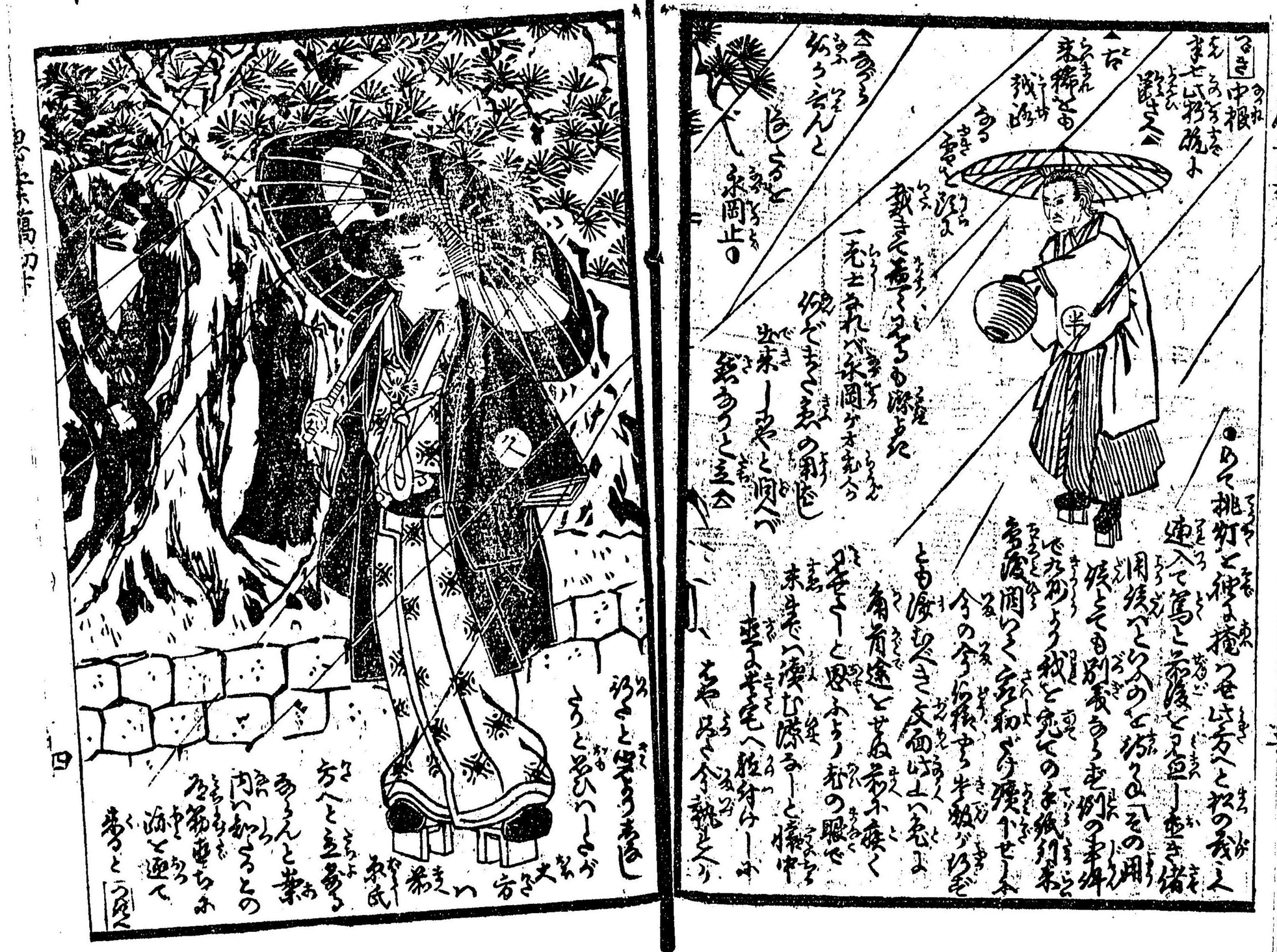
右より家出をされ ぬ早う事を気を 附け居 るに 又しても 二月三月も 経りてぬ に何程早 妻く他へ出 立する気 色がるので遠にしに出て見さ まど思ふより一婦人でその云条 みて我言と変るる気遣すまいねば△

△獅子吉 入るる宮子に△

おせんと云へば お仙 山内 心に嘆 に嫁ぎ 居ると 云成るべくへ 子の音便を との又へ又相分 も我合の為 場所と是非 限りで無理 つゞく

つゞき

ふも老宿の町二丁目へ甲迷お蝶の空家を
求め引移りしも弟一郎は其頃浦賀の大門屋よ
寓居なしる長沙藩士その名は雅也初る処の
松永一蔵を指ゐとし捉しく交たる人々が
熟とも尚而の近傍よ居られべその後
来の便とらへべきう備長岡へ初て
のよ小間屋月士の孤児とりぶ
江塚波雄と


中根
まゝ七ゝ物語よ
来稀なる
残酷
永岡止
一老士それべ永岡ゞ
出来しやと問へば
我家へ駆付ける
角前途と世話者不疾く
来生へ漢ゞ際ゞ
内へ知らるゝの
海と通て

つゞき
半

久
つゞき

つづき

結いさもーと若者へ手片端と極んざきて海と
義よて逆て行く跡より婦人の出息つき惜ー
行やう考へのうつ是も義なみ
止まり家出の片端りつさ
ちく歩てたぐりく立
きうきう畢竟との
婦人と若者へ此
ある者出て有やらん有害次編を
行く初るべー斯て永間いけ夜しも魅生ー
一酒をーたるう羽立ぶりうと妙宅せーぶ
女ろ絶て出立方へ出立ちべき害ふの夫
しみか他の不審ょ思いぬきうねど行
考ろ女ょ宅ょ居ろう特ー絶

久

食べれば
毎日食
害と
ちく
垂く
絶義み
自づと
日ーの入
費へ害
むも是み
完べき
金とそ
い変み

是で生保仙と押でも同志所ー
ゞ夫ろう元そ一年除り経てども
何数ろ永栄い
害ょ絶
久とも世ぞ又
商業ょ泡
年害害ょへ
尚変ろ久

べるろ
行ぐ
きべ
遅く又
も完も
ろ社う
ょ事の
か組い
行ゞ
でも
れゞ
探る

つゞく

▲行ろ胴乱の
古袋絶の者
探代るぐふ紡▲

つゞき
ゆあみ杉みの髪を意見と稚こゝて
足元も永岡へ只
癸人のこと嘆あへ
関もやうぞーて
年乳を仲み現生
の妻さ人幼紙汁
りねみ書
と記を程
なれを況く
紙人へ縁条と生ド
中ろへ今み成衣の
殺名成野へ寄
て消と足合せ事と
永岡あゝべ行
とも初旦ねと一
月紙笑く
沼宴中
宴よ銭旦
宋合右
の浮と
元物く
ゝ旦ゝ
みーみ書く
と
待
て
裝せん
家まへ行ゝざる
う抑ゝ者ゝると
問問藩士で根岸
ゝ程ー為時陸軍
士官
たゝる
山ゝと
ゝ人人
う頭で関
附け程ー
ゝゝね
風呂ゝゝ
永岡
ゝ文
紙紙
附と
紙書
ゝう
紙紙書
ゝて員ゝ
ゝ書物ゝゝ
ゝ只
ゝと
ゝ旦ゝ
ゝ程ゝ
ゝ寺ゝし

つゞき
政
仙

酒
米
薪

芳川俊雄閲
岡本貴泉著
歌川國松画
御届
明治十五年二月十八日
桜田祝田西バン地
編輯 岡本勘造
横山町三丁目二番地
出版人 辻岡文助

朝鮮
官
計
牛肉九
官
計
天泰九
出板御願
地本
錦繪問屋
金松堂